

資料 Senado de la Nacion "Biblioteca de Mayo"  
-- アルゼンチン上院刊行「五月文庫」

著者	佐藤 純
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	49
号	11
ページ	47-56
発行年	2008-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00040881">http://doi.org/10.20561/00040881</a>

# Senado de la Nación “Biblioteca de Mayo”

(アルゼンチン上院刊行「五月文庫」)

さとう じゅん  
佐藤 純

- はじめに  
I 「五月文庫」編纂の経緯・目的  
II 「五月文庫」の構成  
III 各項目の概要  
おわりに

## はじめに

1810年5月25日、リオ・デ・ラ・プラタ副王領下のブエノス・アイレスにおいてクリオーヨ (criollo, 中南米生まれのスペイン人) による革命が起こり、副王バルタサル・イダルゴ・デ・シスネロス (Baltasar Hidalgo de Cisneros) は国外への退去を余儀なくされた。この事件はアルゼンチン史において五月革命 (Revolución de Mayo) と呼ばれている<sup>(注1)</sup>。革命開始150周年を記念してアルゼンチン上院によって刊行されたのが「五月文庫」(Biblioteca de Mayo) である。

日本国内で「五月文庫」を全巻所蔵している図書館は日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所図書館と神戸大学経済経営研究所図書館の2館のみである<sup>(注2)</sup>。「五月文庫」は全17巻20冊から構成される大部の著書であるが、各巻はテーマ毎に編纂され、総目次も巻末にあるため利用しやすい。また、肖像画、風景画、手書きの地図なども多数収録されており視覚的

に興味をそそられる著書である。しかし、1巻1000ページほどあり紙が劣化しているため、破損を防ぐためには閲覧・コピーに注意を要する。

これまで「五月文庫」の存在とその内容に関しては、ラテン・アメリカ史やアルゼンチン史を専門とする研究者においてもほとんど知られてこなかった<sup>(注3)</sup>。しかし、「五月文庫」は1810年の独立にいたるまでの独立戦争第1期から、独立戦争の英雄ホセ・デ・サン・マルティン (José de San Martín) が活躍した1820年代までの時期をカバーしているので、独立期アルゼンチンの研究を発展・深化させることを可能にするであろう。本稿は、「五月文庫」の概略を各巻の冒頭に記されている序論と目次に基づいて示すことによって、日本におけるアルゼンチン史、およびラテン・アメリカ史研究の発展に貢献することを目的とする。最初に「五月文庫」の編纂の経緯・目的、構成を示し、そのうえで内容をみていきたい。

## I 「五月文庫」編纂の経緯・目的

「五月文庫」は、革命開始150周年を1年後に控えた1959年5月21日の国会における上院議員ダビラ (J. Aníbal Dávila) の決議案に基づいて編纂されることが決定された。上院教育委員会 (Comisión de Educación del Honorable Senado)

の指揮・監督の下で、「五月文庫」編集団 (Cu-  
erpo Editor de la Biblioteca de Mayo) が編集作業  
を行った。前者は委員長ダビラと2名の委員と  
1名の書記官、後者は編集長サレーニョ (Ni-  
canor M. Saleño) とコーディネーター、顧問、  
図版編集委員各1名、そして2名の編集員から  
構成されていた。したがって、「五月文庫」編  
集に関わった人物は総勢10名、実際の編集作業  
に従事したのは編集団6名のメンバーであった。  
「五月文庫」編纂の経緯・目的は、上述のダビ  
ラが作成した決議案において明示されているの  
で以下で引用したい。

**【決議案】**

- 第1条：上院の総意に基づき五月革命150周年  
を記念して「五月文庫」という名前の  
アルゼンチン史に関する基本的史料を  
編集する。
- 第2条：文庫は全20冊から構成され、五月革命  
の推移に関するテーマをカバーし、以  
下のテーマ順に愛国者の英雄的行為に  
関する編集・未編集の史料を収録する。  
a) 公示と告示, b) 偉人の肖像画, c)  
歴史的な旗, 小旗, 紋章, d) アルゼ  
ンチンの軍服, e) 通貨, 紙幣と硬貨,  
f) 偉人の覚書, 自伝, g) 当時の地図,  
風景画, 見取図, h) 当時の船と馬車,  
i) 「五月世代」の文芸作品。
- 第3条：各巻は5000冊印刷され、そのうち2500  
冊は一般向けに販売され、残りは公共  
図書館保護委員会 (Comisión Protectora  
de Bibliotecas Populares) と外交・文化  
省文化関係局 (Dirección de Relaciones  
Culturales del Ministerio de Relaciones  
Exteriores y Culto) を通して公共図書

館・施設に配本される。

- 第4条：編集における史料の選別と管理は上院  
の教育委員会の仕事である。印刷は上  
院印刷局か、または一般競争入札によ  
って選定された業者が行う。
- 第5条：この編集に関わる費用は上院の予算項  
目に計上される資金によってカバーさ  
れる。

II 「五月文庫」の構成

以上の「決議案」に基づいて全17巻20冊 (第  
9, 16, 17巻は第1部と第2部の2冊) から構成  
される「五月文庫」が編集・出版された。第1  
～10巻までが1960年、第11～13巻までが62年、  
第14～17巻までが63年に出版された。以上で示  
したように、「五月文庫」は、(1) 覚書, (2)  
自伝, (3) 日誌と記録, (4) 文学, (5) 定期刊  
行物, (6) 調査と要約, (7) 独立戦争, 以上の  
7つの項目に分けて編集されている。次節で各  
項目の概要を記す。

- 第1巻：覚書 (Memorias)
- 第2～3巻：自伝 (Autobiografías)
- 第4～5巻：日誌と記録 (Diarios y Crónicas)
- 第6巻：文学 (Literatura)
- 第7～10巻：定期刊行物 (Periodismo)
- 第11～13巻：調査と要約 (Sumario y Expedien-  
tes)
- 第14～17巻：独立戦争 (Guerra de la Inde-  
pendencia)

### Ⅲ 各項目の概要

#### 1. 覚書

第1巻には6名の筆者によって五月革命に関わる歴史的出来事について記された覚書が収録されている。これらの覚書は、スペイン副王時代末期の状況と五月革命前後の動乱期に生じた様々な出来事に関する同時代人の記録である。以下に収録されている全覚書の作者とタイトルを示す。

- ・ フランシスコ・サグイ (Francisco Sagui) 「リオ・デ・ラプラタに対するスペイン支配の最後の4年間」
- ・ イグナシオ・ヌニェス (Ignacio Núñez) 「アルゼンチン共和国の歴史的出来事」
- ・ エンリケ・マルチネス (Enrique Martínez) 将軍「死後出版されたイグナシオ・ヌニェス氏の『アルゼンチン共和国の歴史的出来事』に対する意見」
- ・ ギジェルモ・ブラウン (Guillermo Brown) 「アルゼンチン海軍の作戦行動に関する覚書」
- ・ ダマソ・デ・ウリブル (Damazo de Uriburu) 「覚書1794—1857」
- ・ ホセ・プレサス (José Presas) 「ブラジル女王、未亡人の現ポルトガル女王、ブルボン家のカルロタ・ジョアキナ (Carlota Joaquina) に関する秘密の覚書」

フランシスコ・サグイは商人として成功した人物であり、また1829年から52年の長期にわたって独裁者として君臨したフアン・マヌエル・デ・ロサス (Juan Manuel de Rosas) の義兄としても知られている。彼の覚書はイギリスの侵攻

やクリオーヨの反抗に直面した副王体制末期の状況を詳細に伝えている。イグナシオ・ヌニェスとエンリケ・マルチネス将軍の覚書は、イギリス海軍によるリオ・デ・ラ・プラタ地域に対する軍事行動に関する記録である。これらは同地域に対するイギリス外交史研究者にとって有益な史料となる。

また、ホセ・プレサスはスペイン王カルロス4世 (Carlos IV) の長女で、ポルトガル王ジョアン6世 (João VI) の王妃カルロタ・ジョアキナの書記官であった人物である。カルロタ・ジョアキナは、イベリア半島がナポレオンの支配下に置かれた後に、リオ・デ・ラ・プラタ地域におけるポルトガルの支配権確立を目指し種々の陰謀を策したとされるが、ホセ・プレサスの覚書にはその詳細について記されている。また、王妃の肖像画も収録されていることも付言しておく。

#### 2. 自伝

第2～3巻には、アルゼンチンの独立と国家形成において重要な役割を果たした人物によって書かれた自伝が収録されている。これらの巻によって独立戦争期の状況を詳細に把握することが可能となる。また、作戦図、地形図、そして肖像画なども多数収録されている。以下において、収録されている全自伝の作者を順に列挙する。

Manuel Belgrano, Cornelio Saavedra, Mariano Moreno, Pedro José Aglero, José de Moldes, Hilarión de la Quintana, Gervasio Antonio Posadas, Martín Rodríguez, Deán Gregorio Funes, José Melián, Juan Ignacio Gorriti, Ignacio Alvarez Thomas, Juan Ramón Balcarce, José Rondeau, Cornelio Zelaya, Juan Bautista Azopardo, José de

San Martín, Rudecindo Alvarado, Esteban Romero, Eustoquio Díaz Vélez, Juan Isidro Quesada, Nicolas Villanueva, Manuel Alejandro Pueyrredón (以上、第2巻に収録)

Juan Martín de Pueyrredón, Francisco Seguí, Domingo Matheu (以上、第3巻に収録)

上述の人物は五月革命において重要な役割を果たしたが、特にマリアーノ・モレノ (Mariano Moreno) は副王に対して「開かれた市会」(cabildo abierto) の開催を要求し、コルネリオ・サアベドラ (Cornelio Saavedra) は政治委員会の委員長であった重要人物である。また、マヌエル・ベルグラノー (Manuel Belgrano) はパラグアイ遠征で知られる著名な軍人であり、ホセ・デ・サン・マルティン (José de San Martín) はアルゼンチン史において独立の英雄とされる人物である。遠征の記録や、書簡のやり取りが収録された彼らの自伝によって、五月革命の原因と経過を知ることが可能となるであろう。

特にホセ・デ・サン・マルティンの自伝について言及しておきたい。彼の自伝は「ヨーロッパとアメリカにおける軍事行動に関する自筆の覚書」「ミレル (Miller) 将軍の質問に対する回答」「ペルーの将軍ラモン・カスティージャ (Ramón Castilla) に対する手紙」「ビセンテ・チラベルト (Vicente Chilavert) に対する手紙」という構成になっている。ホセ・デ・サン・マルティンのヨーロッパにおける軍事行動に関しても書かれており非常に興味深い史料であるといえる。いずれにせよ、これらの自伝が独立期アルゼンチンの研究を深化させることに疑いはない。

### 3. 日誌と記録

第4巻には全13名の日誌と記録が収録されており (そのうち8名は筆者が不明である)、第5

巻には全17名の日誌と記録が収録されている (そのうち5名は筆者が不明である)。上記1で紹介した覚書と、これら同時代人によって書かれた複数の日誌と記録をあわせて用いることによって、五月革命に至るまでの状況、革命の様子、革命後の状況を、把握することができよう。以下に収録されている日誌と記録の筆者とタイトルを記す。

- ・ 筆者不明「1809年7月の出来事の日撃者であるラ・パスの移民の日記」
- ・ 筆者不明「1809年の出来事に関してブエノス・アイレスの住人がパラグアイのアスンシオンの住人に書き送った手紙」
- ・ 筆者不明「政治革命に関する歴史的記録：1809年7月16日から1810年2月20日」
- ・ 筆者不明「証人の日記：1810年5月21—25日」
- ・ 筆者不明「さまざまな出来事に関する日記；1810年5月21—28日」
- ・ 筆者不明「ブエノス・アイレスでの革命を企図したモンテビデオ当局の重要人物の日記：1810年5月24日—8月3日」
- ・ 筆者不明「ブエノス・アイレスの出来事に関する日記：1810年5月20—26日」
- ・ 筆者不明「ブエノス・アイレスで起こった出来事に関する日記：1810年5月21日—1810年6月6日」
- ・ ベドロ・アンドレス・ガルシア陸軍大佐 (Coronel Pedro Andrés García) 「サリナス・グランデスへの旅の日記：1810年10月21—22日から12月」
- ・ ホセ・ハビエル・ホルフェ (José Javier Jorfé) 「サン・フアン軍の指揮官の日記：1810年6月18日—7月11日」

- ・ フアン・ホセ・エチェバリア (Juan José Echevarría) 「1811年4月5—6日のブエノス・アイレスでの出来事と同年9月の選挙に関する日記」
  - ・ マヌエル・アブレウ (Manuel Abreu) 「ミラフローレスとパンチャウカの処理に関する日記：1821年リマ」
  - ・ フアン・マヌエル・ベルティ (Juan Manuel Beruti) 「奇妙な出来事」  
(以上第4巻に収録)
  - ・ リニエルス伯爵 (Conde de Liniers) 「リオ・デ・ジャネイロにおける出来事の報告」
  - ・ 筆者不明 「ブエノス・アイレスの1809年革命に関する覚書：1809年1月1—16日」
  - ・ 筆者不明 「チュキサカ州における1809年5月25日木曜日の革命に関する真実の光景」
  - ・ ホセ・フォルナゲラ陸軍大佐 (Coronel José Fornaguera) 「5月革命と革命以前の出来事における彼の役割に関する日記」
  - ・ ホセ・マリア・ロメロ (José María Romero) 「1810年ブエノス・アイレスの革命の歴史に資するための覚書」
  - ・ ルカル伯爵 (Conde de Lúcar) 「スペイン大公へ送られた報告書」
  - ・ 筆者不明 「1810年5月20—25日のブエノス・アイレスで生じた出来事のニュース」
  - ・ フレイ・グレゴリオ・トーレス (Fray Gregorio Torres) 「1810年5月の出来事に関する記録：1810年5月23—28日」
  - ・ ラモン・マヌエル・デ・パソス (Ramón Manuel de Pazos) 「1810年5月の出来事に関するフランシスコ・ファニコ (Francisco Juanico) 氏への手紙」
  - ・ 作者不詳 「五月革命の歴史的特長」
  - ・ トマス・グイド少将 (Brigadier general Tomás Guido) 「1810年5月25日：歴史的評論」
  - ・ フランシスコ・デ・オルドゥーニャ (Francisco de Orduña) 「五月革命」
  - ・ アルカントレ・ヒメネス司祭 (Presbítero Alcántare Giménez) 「コルドバにおける五月革命の影響に関する覚書」
  - ・ マルセリーノ・ロドリゲス (Marcelino Rodríguez) 「1811年パラグアイ革命に関する記録」
  - ・ 作者不明 「リニエ將軍の最期に関する報告」
  - ・ フアン・ホセ・アルコン (Juan José Alcón) 「フアン・ラミレス (Juan Ramirez) 元帥のラ・パス、プーノ、アレキパ、クスコなどの内陸部への軍事遠征に関する日記」
  - ・ トマス・グイド 「パンチュアナでの交渉」
- #### 4. 文学
- 第6巻は、La Lira ArgentinaとLa Abeja Argentinaから構成されている。これらは、巻頭に記されているように、アルゼンチン初の本格的週刊誌*Gazeta de Buenos Aires*と共に、「1810年5月世代の最も重要な証言」である。特にLa Lira Argentinaは、五月革命期を生きた人々の感覚や思想を知るうえで貴重な文学作品であるので若干言及しておきたい。
- この詩集の副題「独立戦争期のブエノス・アイレスにおいて生み出された詩集」が示すように、1810年以降ブエノス・アイレスで発表された5行詩が収録されている。これらはドン・ラモン・ディアス (Don Ramón Díaz) によって収集され1824年に出版された。100年後の1924年には第2版が出版されたが、「五月文庫」には初版が収録されている。その総ページ数は約520ページにも及ぶ。

これらの詩は、スペイン副王による圧制から解放されたアルゼンチン人の自由に対する喜びの声を率直に表現したものであり、独立後の混乱期におけるアルゼンチン人の公共心とモラルを鼓舞したと思われる。ちなみに、第6巻の最後に収録されている「愛国の行進」(Marcha Patriótica) という詩は、「開かれた市会」のメンバーであったアレハンドロ・ピセンテ・ロペス＝プラネス (Alejandro Vicente López y Planes) によって作られたものであるが、後にブラス・パレーラ (Blas Parera) によって曲がつけられアルゼンチンの国歌となった。拙訳ではあるが、「自由」「平等」の理念に満ち溢れたこの詩の冒頭部分を以下に紹介したい。

聞け、人々よ、聖なる叫びを  
自由、自由、自由、  
聞け、腐った鎖の音を、  
高貴なる平等の王座をみよ。  
地表から偉大なる国家が立ち上がる。  
それは百の月桂樹に飾られ、  
ライオンもその月桂樹の下にひざまずく。

### 5. 定期刊行物

第7巻から第10巻までの4巻5冊(第9巻は2分冊)には、五月革命を契機に刊行された定期刊行物が収録されている。これらの定期刊行物によって、五月革命期に生じた事件や革命に直接関わった人物に関してのみならず、当時のリオ・デ・ラ・プラタ地域の経済・社会状況の詳細についても知る事が可能となろう。雑誌毎に収録されている巻と年月日を記しておく。

- ・ 「批評家」(El Censor) (1812年1月7日-3月24日：第7巻所収, 1815年8月15日-1819年2月6日：第8巻所収)
- ・ 「殉教か自由か」(Martir o Libre) (1812年

3月29日-5月25日：第7巻所収)

- ・ 「アルゼンチン新聞」(La Prensa Argentina) (1815年9月5日-1816年11月12日：第7巻所収)
- ・ 「アルゼンチン時評」(La Cronica Argentina) (1816年8月30日-1817年2月8日：第7巻所収)
- ・ 「アメリカの観察者」(El Observador Americano) (1816年8月19日-11月4日：第9巻第1部所収)
- ・ 「独立」(El Independiente) (1816年9月15日-1817年1月5日：第9巻第2部所収)
- ・ 「南の星」(Estrella del Sud) (1820年9月9日-10月16日：第9巻第2部所収)
- ・ 「歩哨」(El Centinala) (1822年7月28日-1823年12月7日：第9巻第2部所収)
- ・ 「各州からの報告」(El Correo de las Provincias) (1822年11月19日-1823年4月10日：第10巻所収)
- ・ 「国民」(El Nacional) (1824年12月23日-1826年4月16日：第10巻所収)

### 6. 調査と要約

第11~13巻は独立前後の重要な事件に関する調査記録である。収録されている調査記録のタイトルを以下に全て記しておく。なお、第11巻に収録されているポルトガルとイギリスのリオ・デ・ラ・プラタ地域に対する政策に関する調査記録には、既述のポルトガル女王カルロタ・ジョアキナの陰謀の全貌が、イギリスの著名な海軍提督スミス (W. Sydney Smith) やイギリスの外相カッスルレー (R. S. Castlereagh) との関係で記されている。これらを用いることによって、ヨーロッパの保守的な秩序を重視するカッスルレーがカルロタ・ジョアキナを王座につけ

ることによって、リオ・デ・ラ・プラタ地域の革命的動きを抑えようとしていた事実を実証的に明らかにすることができよう。

- ・ 「リオ・デ・ラ・プラタに対するポルトガルの政策に関する史料：1805—1810年」
- ・ 「リオ・デ・ラ・プラタに対するイギリスの政策に関する史料：1806—1810年」
- ・ 「サチュルニーノ・ロドリゲス・ペーニャ (Saturnino Rodríguez Peña) とディエゴ・パロイシエン (Diego Paroissien) の活動：1807—1810年」
- ・ 「フアン・マルティン・デ・プエイレドン (Juan Martín de Pueyrredón) の活動：1807—1810年」
- ・ 「1809年1月1日にブエノス・アイレスで起こった出来事に関する史料」第1部
- ・ 「同上」第2部
- ・ 「その他諸々の史料」  
(以上第11巻に収録)
- ・ 「アントニオ・ホセ・テソ (Antonio Jose del Texo) 指揮官に対してとられた処置：1809—1910年」
- ・ 「スペイン支配からリオ・デ・ラ・プラタの独立を企てたことにより告訴されたマルティン・デ・アルサガ (Martin de Alzaga), フェリペ・デ・センテナツハ (Felipe de Sentenach) とホセ・ミゲル・デ・エスヒアエガ (Jose Miguel de Ezgiaga) に対してとられた処置」第1部
- ・ 「同上」第2部
- ・ 「同上」第3部  
(以上第12巻に収録)
- ・ 「デサグアデーロ事件にいたる経緯と経過」
- ・ 「デサグアデーロ事件の原因」第1部

- ・ 「同上」第3部
- ・ フアン・ホセ・カステル (Juan José Castell) による処置：1811—12年」
- ・ 「現地委員会, 1813年：1813—14年」
- ・ 「愛国心とその保全に関わる犯罪に対する訴訟」経緯
- ・ 「同上」第3集
- ・ 「同上」第5集
- ・ 「同上」第6集
- ・ 「同上」第8集
- ・ 「同上」第10集  
(以上第13巻に収録)

## 7. 独立戦争

周知のように、五月革命後のリオ・デ・ラ・プラタ地域は連邦派と集権派の争いに、同地域に影響力を及ぼそうと画策するイギリスやスペインの思惑が絡み合い混乱することとなる。しかし、1816年7月9日、ホセ・デ・サン・マルティンが混乱を収拾し、フアン・マルティン・デ・プエイレドン (Juan Martín de Pueyrredón) 指導の下でリオ・デ・ラ・プラタ連合州は正式に独立を宣言することとなった。

ホセ・デ・サン・マルティンは1812年にヨーロッパからアルゼンチンに帰国して後、「アンデス部隊」(Ejército de los Andes) を結成し、1817年1月に軍事行動を開始する。1818年3月のカンチャ・ラヤダ (Cancha Rayada) の戦いでスペイン軍に敗北したが、同年4月のマイポ (Maipo) の戦いで決定的勝利を収め、連合州の独立を確かなものにした。かかるホセ・デ・サン・マルティンの活動に関する記録が収録されているのが第14巻から第17巻である。第16巻第1部にはホセ・デ・サン・マルティンの「アンデス越え」に関する詳細な記録が収録されて



いる。また、これらの巻にはホセ・デ・サン・マルティンのみならず、彼の側近たちの油絵や軍旗のコピーが収録されていることも付言しておきたい。以下にその目次を示す。

- ・ 「軍隊の組織に関わる史料：1810—1821年」
- ・ 「パラグアイ遠征：1810—1811年」
- ・ 「東方遠征：1810—1811年」
- ・ 「東方遠征：1812—1814年」
- ・ 「リトラル防衛戦1811—1814年」
- ・ 「チリにおけるアルゼンチン人の援軍」
- ・ 援軍によるアルト・ペルー遠征：1810—1812年」

(以上第14巻に収録)

- ・ 「北部アルゼンチンに対する王党派の侵攻：1812—13年」
- ・ 「第2次アルト・ペルー遠征：1813—14年」
- ・ 「ペルーの援軍におけるホセ・デ・サン・マルティン：1814年」
- ・ 「第3次アルト・ペルー遠征：1814—16年」
- ・ 「ペルーにおける援軍：1816—19年」
- ・ 「サルタとフワイの防衛戦：1820—21年」

(以上第15巻に収録)

- ・ 「I ホセ・デ・サン・マルティン将軍」
- ・ 「II ベルナルド・オイギンス (Bernardo O'Higgins) 将軍。ホセ・ヒル (José Gil) (1819) の油絵」
- ・ 「III 軍隊の進行とウスバジャータとロス・パトスを通るアンデス越え」
- ・ 「IV ミゲル・エスタニスラオ・ソレル (Miguel Estanislao Soler) 将軍。作者不明の油絵」
- ・ 「V アンデス部隊の旗」
- ・ 「VI フアン・グレゴリオ・デ・ラス・エラス (Juan Gregorio de las Heras) 将軍。ホセ

・ヒル (1832) の油絵」

(以上第16巻第1部に収録)

- ・ 「VII アンデス部隊の合図の計画」
- ・ 「VIII 敵の旗：(a) <タラベラ>軍の旗，(b) <チリ竜騎兵>の軍旗」
- ・ 「IX 憲法制定国会におけるチリの独立を承認した連合州最高裁判所の政令の発表」
- ・ 「X チリの独立を承認する連合州憲法制定国会における至上の法令」

・ 「XI カンチャ・ラヤダの戦いの平面図」

・ 「XII マイプーの戦いの第一局面。手記」

・ 「XIII マイプー平原の戦いの平面図」

・ 「XIV マイポの旅程。印刷」

・ 「XV ホセ・マティアス・サピオラ (Jose Matias Zapiola) 将軍。カビツシア (I. Caviccia) の油絵」

・ 「XVI マヌエル・デ・オラザバル (Manuel de Olazabal) 大佐」

・ 「XVII ホセ・デ・サン・マルティン将軍からギジェルモ・ミレル (Guillermo Miller) 将軍への封書：1827年5月12日」

(以上第16巻第2部に収録)

・ 「I マリアーノ・ネコチェア (Mariano Necocha) 将軍。ホセ・ヒルノ (José Gilno) の油絵 (1821)」

・ 「II フアン・アントニオ・アルバレス・デ・アレナレス (Juan Antonio Alvarez de Arenales) 将軍」

(以上第17巻第1部に収録)

・ 「III リマの市議会によって解放者に贈呈されたピサロの旗」

・ 「IV ホセ・デ・オラバリア (Jose de Olavarria) 大佐。グルー (J. Goulu) の油絵 (1827)」

・ 「V イッポリート・ブシャル (Hippolito

Boucharde)。ホセ・ヒルの油絵 (1819)」

- ・ 「VI 退却について。ホセ・デ・サン・マルティンからミレル將軍への封書。1827年1月27日、ブルセラス」

(以上第17巻第2部に収録)

## おわりに

以下で、「五月文庫」を使用するうえで注意を要する点、「五月文庫」を用いた研究の可能性、そして最後に、「五月文庫」の意義を近年のラテン・アメリカ史の研究動向との関連で述べておきたい。

「五月文庫」が編集されたのは急進党アルトゥーロ・フロンディシ (Arturo Frondizi) の文民政権下においてであったが、この時期は、国際主義を指向する軍部と民族主義を掲げるペロニスタ (Peronista) による政権の交代が目まぐるしい時期であった。アルトゥーロ・フロンディシは後者の支持を背景に政権を握ったため民族主義的な路線を強く打ち出していく。かかる状況下でフロンディシ政府は、「五月文庫」の出版によって英雄が活躍する栄光に満ち溢れた歴史を国民に提示することを意図していたと推察される。そのため「五月文庫」では、英雄の事跡や、副王支配体制からの独立の経過を際立たせる事実が意図的に抽出されている。実際に、先に紹介したように「五月文庫」の編集を決定した【決議案】第2条には、「愛国者の英雄的行為に関する編集・未編集の史料を収録している」と明記されている。したがって、「五月文庫」に政治的思惑による偏向があることは否めない事実であり、このことを認識した上で「五月文庫」は読まれる必要がある。

「五月文庫」を用いた研究の可能性について若干述べておこう。第1に、いわゆる「非公式帝国」(Informal Empire) アルゼンチンに関する研究において、なぜインドはイギリス植民地となる一方で、アルゼンチンは公式の支配を受けなかったのか、ということが問題となってきたが、このことを明らかにするためには、独立期リオ・デ・ラ・プラタ地域に対するイギリスの外交政策を詳細に研究することが必要となるであろう。これについてはすでに、イギリス帝国史研究者によってある程度明らかにされてはいるが [McLean 1995]、スペインやポルトガルの同地域に対する外交政策との関係で研究をさらに深めることができるであろう。以上のことは、本史料の第1～3巻、11巻を主に使用し、その他、5項で紹介した定期刊行物を補足的に使用することによって可能となる。

その他、7項で紹介した史料を用いることによって、ホセ・デ・サン・マルティンの研究を深化させることができよう。また、1項で紹介した覚書を用いて、副王支配体制末期の研究を本格的に行うこともできよう。さらには、4項で紹介した文学作品を中心的に用いることによって、新興国家アルゼンチンを事例とした国民国家形成に関わる研究に取り組むこともできる。「五月文庫」を用いることによって、国民国家が形成されていく過程を様々な視点から考察することが可能となるであろう。

最後に、近年のラテン・アメリカ史の研究動向との関連で「五月文庫」の意義を強調しておきたい。2008年からラテン・アメリカ研究協会 (Society for Latin American Studies) はラテン・アメリカ時報研究書シリーズ (The Bulletin for Latin American Research Book Series) の刊行をは

じめた。同シリーズの第1巻が最近刊行されたが、その序論では歴史、地理、政治、国際関係、人類学、社会学、ジェンダー研究、文化研究などにまたがる学際的な研究が目指されるべきことが指摘されている<sup>(注4)</sup>。以上で紹介してきたように「五月文庫」は、これらの学問領域の研究全てに応えるうる内容をもつものである。

本稿では、「五月文庫」の構成と概要を各巻の巻末に収録されている目次を手がかりに示すにとどまった。本稿冒頭で述べたように「五月文庫」は大部であり、紹介者の能力では適切かつ十分にその価値や魅力を伝えることができなかった。また、「五月文庫」には当時を偲ばせる肖像画・風景画や手書きの地図などが多数収録されているが、これらについても紹介することができなかった。紹介者としては、本稿で示した構成と概要が、「五月文庫」を使用する際のガイドとしての役割を果たし、「五月文庫」を本格的に用いた研究がなされることを期待したい。

(注1) 五月革命や独立期リオ・デ・ラ・プラタ地域の歴史の概観を得るには、増田(2000)を参照されたい。

(注2) このことは本稿の査読者に指摘をいただ

いた。この場を借りて貴重な助言をしていただいた査読者に対して謝意を表したい。

(注3) 「五月文庫」の所在とその価値を指摘され、また紹介する貴重な機会を与えてくださったのは日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所・地域研究センター・ラテンアメリカ研究グループ長の宇佐見耕一氏である。同氏と「五月文庫」を閲覧するうえで多大なる便宜を与えてくださった同機構職員の方に対し記して謝意を表したい。

(注4) 第1巻は、イギリス「非公式帝国」をテーマとしてラテン・アメリカ史を扱ったものである。同書は従来の政治・経済学的研究をさらに推し進める一方で、文化研究(Cultural Studies)の手法に基づく研究を取り入れている。詳細についてはBrown(2008, vii-viii)のPrefaceを参照されたい。

#### 文献リスト

- 増田義朗編 2000.『ラテン・アメリカ史Ⅱ 南アメリカ』山川出版社。
- Brown, Matthew ed. 2008. *Informal Empire in Latin America, Culture, Commerce and Capital*. Oxford: Blackwell Publishing.
- McLean, David 1995. *War, Diplomacy and Informal Empire, Britain and the Republic of La Plata, 1836-1853*. London and New York: British Academic Press.

(八戸工業高等専門学校准教授)